

第一アンチノミー前史

——カント『就職論文』の発展史的意義について——

東京大学 鈴木元

はじめに

1798年9月21日付C・ガルヴェ宛書簡において、カントは、諸々のアンチノミーの問いとの取り組みが「独断論のまどろみ」から目覚める契機であったと述べている（XII 257f.）¹。この書簡が象徴的に示す通り、『純粹理性批判』の「純粹理性のアンチノミー」（以下、それぞれ『批判』、アンチノミー論と略す）が、批判哲学の認識論を構成するきわめて重要な部門であるということは論を俟たない。それゆえ、アンチノミー論の発展史を再構成することは、カントの認識論を理解する上で必要不可欠である。

アンチノミー論の発展史について堅実な研究を行なったN・ヒンスケの見解とそれに対する反論を概観することで研究状況を整理する。アンチノミーという語は前批判期には登場せず、『批判』で初めて用いられるのだが、前批判期には既にアンチノミー論の萌芽となる議論が存在する。ヒンスケは、前批判期の萌芽的な議論と批判期のアンチノミー論を合わせて「アンチノミー問題 [Antinomienproblematik]」と呼んだ上で²、「アンチノミー問題」の形成史を以下の三段階に分類している。第一段階は1755年から1756年の諸著作に見出され、そこでは二つの主張の対立という意味でのアンチノミー概念の雛形が確認される³。第二段階は1770年に執筆された教授職就任論文『感性界と叡智界の形式と原理について』（以下、『就職論文』と略す）に見出され、この論文において看取される「知性⁴の諸法則」と「感性の諸法則」の対立（II 392）は、諸法則の対立という意味でのアンチノミー概念の原型として認められる。さらに、『就職論文』には、数学的アンチノミーの解決方法に影響を与えた議論が含まれている⁵。そして第三段階は『批判』のアンチノミー論であり、この段階に至って理性諸法則の対立という意味でのアンチノミー概念が確立する⁶。

L・クライメンダールは、このヒンスケの整理に抗して、アディッケスによって1769年に書かれたと推定される諸々の覚書に基づき⁷、「アンチノミー問題」は、第二段階に位置する『就職論文』が書き上げられた1770年以前には完成していたと主張する。クライメンダールによれば、1769年には理性諸法則の対立としてのアンチノミー概念が成立しており、「アンチノミー問題」の解決策として、『就職論文』で展開される時空の主観性の教説が発見される。この教説の発見が、1769年の「大いなる光」（*Refl.* 5037, XVIII 69）の正体に他ならないというわけである⁸。

このように、「アンチノミー問題」の形成史については、三段階説を取るのか、それとも二段階説を取るのかをめぐって解釈が分かれている。1772年2月21日付M・ヘルツ宛書簡(X 130f.)が端的に示す通り、『就職論文』における知性の「《実在的使用》」(II 393)が懐疑に晒され、純粹悟性概念の演繹の問題が生成したこと、また、それに伴い、批判期に至って知性が悟性と理性に分化したこと⁹を踏まえるのならば、『批判』のアンチノミー論を、理性諸法則の対立としての第三段階に位置づけて、三段階説を取るのが穏当であろう¹⁰。しかし他方で、第二段階の『就職論文』における感性の法則と知性の法則の対立、別言すれば、感性界と叡智界の二世界論が、『批判』のアンチノミー論の形成に決定的な影響を与えたこともまた疑いを容れない。したがって、三段階説をとるにせよ、『批判』のアンチノミー論の形成過程を描くためには、「アンチノミー問題」の第二段階と第三段階のそれぞれの役割を明確にしなくてはならない。本論文の目的は、第二段階の『就職論文』が有する発展史上の意義を明確にすることである¹¹。上述の通り、『就職論文』には数学的アンチノミーの原型となる議論が認められる。本論文はその議論を、世界の空間的・時間的な量が無限か否かという『批判』において第一アンチノミーとして定式化される問題に即して読み解く。そうすることで最終的に、『就職論文』がどのような仕方で『批判』のアンチノミー論の形成に貢献したのかを明らかにする。

本論文は以上の目的を達成するために、第一節では『就職論文』の議論の前提事項であるヴォルフ学派の世界概念とカントによるその継受のあり方を考察し、ついで第二節では、世界の時間的・空間的な量という第一アンチノミー的な主題に即して『就職論文』の議論を跡付け、最後に第三節では、アンチノミー論の発展史における『就職論文』の意義を論究する。

第一節 バウムガルテンの世界概念とカントによるその受容

『就職論文』で論じられるカントの世界概念は、ヴォルフ学派の哲学者バウムガルテンの『形而上学』第四版における世界概念の定義を踏まえている。そこでまずは、バウムガルテンの世界概念の定義を確認する。

バウムガルテンは『形而上学』において、「《世界》(cf. 91項、403項、434項、宇宙、万有)とは、有限で現実的なものどもから成る系列(集合、全体)であり、この系列は他の系列の部分ではない」(M. §. 354)と述べている¹²。この世界概念の定義には次に挙げる三つの特徴が含まれている。第一に、世界は系列として、すなわち、諸事物の時空的連結として捉えられている(Vgl. M. §. 374)。第二に、世界は「有限で現実的なものども」から成り立つ系列

である。つまり、無限な存在者である神はこの系列の構成要素とはならず、世界は有限な被造物のみから成るのである。第三に、世界は「他の系列の部分ではない」系列である。第三の特徴を具体例で説明しよう。家と町は諸事物が連結してできる系列とみなせるが、家が町の部分である限りで、町は家に対して全体である。だが、町は地球という系列に対してはその部分にすぎない。他方、世界は、町のように他の系列（家）に対して相対的に全体となるのではなく、他のどの系列に対しても絶対的に全体となる。これが第三の特徴の内実である¹³。

カントは『就職論文』の冒頭部で、「《世界》」を「部分ではない全体」と述べており、その点に鑑みると上記のバウムガルテンの世界概念を継承していると言えるが、知性と感性という世界概念の「二重の起源[*duplex genesis*]」に着目する点ではバウムガルテンと異なる立場をとっている（II 387）。バウムガルテンの『形而上学』において、認識能力は「曖昧かつ混濁とした仕方、つまり、非判明な仕方では何かを認識する能力」としての「《下級認識能力》」と、「判明に認識する能力」としての「《上級認識能力》」に分類される（M. §. 520, §. 624）。『就職論文』では、感性的認識と知性的認識をそれぞれ混濁とした認識、判明な認識とみなすヴォルフ学派の立場が批判される。というのも、幾何学的認識のように感性的であるが判明な認識が存在し、判明な認識は知性のみならず感性からも生じるからである（II 394f.）。こうした感性的認識と知性的認識の区別が世界概念にもあてはめられ、世界概念は以下のように二つの心的起源によって分類されることになる。

というのも、諸部分が与えられた場合に、知性の抽象概念によって全体の複合を理解することと、この一般的概念をいわば理性の課題として感性的な認識能力によって実行すること、すなわち、それを判明な直観によって具体的に呈示することとは別のことだからである。（II 387）

上記の引用文では、世界が部分から構成された複合体であることを認識する方法が、感性によるものと知性によるものに区分される。一方で、知性の「抽象概念」によって「全体の複合」を理解するというのは、叡智界としての世界を「《質料》」、「《形式》」、「《包括性》」の三つの要素によって捉えることである。「質料」とは世界の構成部分としての諸実体である。「形式」とは諸実体間の「同位的秩序」であり、これは、部分としての諸実体が「互いに

補完しながら全体を構成する要素のように相互に関係しあう」ことで成り立つ秩序である。最後に、「包括性」とは「相補的な諸部分の絶対的・一切性 [omnitudo]」であり、これは、「他の系列の部分ではない」という先に確認したバウムガルテンの世界概念の第三の特徴を指す (II 389ff.)。まとめると、世界を複合体として知性によって認識するというのは、有限諸実体を構成部分とする絶対的全体として世界を捉えることであると言える。

他方で、世界概念を「判明な直観によって具体的に呈示する」というのは、その概念を「部分に部分を継起的に加えることによって産出」すること、すなわち、単位としての部分を累積的に付加することで世界全体の量を測ることであり、全体へと向けて単位を継起的に付加する操作は「《総合》」と呼ばれる。量の測定は、この操作が有限時間内に完結する場合にのみ可能となるため、「総合」によって産出される世界概念は時間という「直観の諸法則」に従うとされる (II 387)。

単位としての部分を全体に向かって加えていくという操作は、部分と全体という対概念によって量を捉えるという発想に基づいており、この発想はヴォルフ学派に由来する。バウムガルテンによれば、「《量》」とは「他のものを想定することなしに（共存在 [compraesentia] なしに）」判明に理解することができない諸事物の相違であり、逆にそうすることなしに判明に理解することができる諸事物の相違は「《質》」である (M. §. 69)。例えば、三角形と四角形は、空間中に並べられなくとも、その定義やそこから導かれる諸性質によって区別されうる。だが、二つの相似な三角形は定義や性質によっては区別されえない。もしそれらが区別されうるとすれば、それは、当該の二つの相似な三角形が空間中に横に並べられて、両者の大きさが異なると理解されるべきである。別言すれば、量とは同質的な諸事物の間に見出される相違なのである。こうした量の捉え方に基づいて、「その部分が全体に等しいものは [その全体] 《より大きく》、その全体が部分に等しいものは [その部分] 《より小さい》」 (M. §. 160) といった具合に、大小が部分と全体の対概念によって定義される。そして、ある事物の量の判明な認識とは、その事物の量を、単位としての同質的な部分を積み上げてできる全体として理解すること、すなわち、同質的な部分に対する比によって、つまり数によって表すことなのである¹⁴。

カントは、こうした量の捉え方に関わるヴォルフ学派の思想を継承しているが¹⁵、感性について判明な認識を認めないヴォルフ学派とは異なり、量に関する判明な認識を感性の管轄に据え、感性による判明な認識が可能であると考えている。感性による量の判明な認識が、知性的認識から区別されるの

に対応して、世界概念についても、感性によってその量を認識することと、知性によって世界を諸実体から構成される絶対的全体として認識することが区別される。カントが知性と感性という世界概念の「二重の起源」に注目するのはこのような事情による、次節では、こうした感性的認識と知性的認識の区別が、世界の量が無限か否かという『批判』において第一アンチノミーとして定式化される問題との取り組みと密接に連動していることを示す。

第二節 世界の無限性と取り違えの誤謬

『就職論文』では、世界の延長や持続が「無限量 [*quantum infinitum*】」であることが前提とされ、その上で、世界の無限な延長と持続が、単位の累積的な付加によって有限時間内に計測しえないという事態が取り上げられる (II 388)。そもそも、世界の空間的・時間的な量が無限であるという想定自体が、自明な事柄ではない。だが、哲学史的に見れば、デカルトが神の「無限 [*infinitum*】」と空間の「無際限 [*indefinitum*】」を区別したように¹⁶、17・18世紀の西洋哲学においては、無限な空間と時間は哲学的思考を大いに触発するテーマであった¹⁷。そのことを踏まえると、カントが空間と時間を無限なものとして前提することも理解されうる (Vgl. II 405)¹⁸。

カントによれば、世界が量的に無限であるという主張は、知性によって認識された世界 (叡智界) に妥当するものではない。ここに、『批判』の第一アンチノミーにつながる問題設定が存在する。第一節で確認した通り、知性によって認識された世界とは、諸実体から構成される絶対的全体としての世界である。この絶対的全体としての世界について、その量を感性によって認識しようするとき、以下のような矛盾が生じる。

この絶対的全体性 [*totalitas*] は身近で容易に手に入りやすい概念のように見える。定義におけるように否定的に言明される場合には特にそうである。しかしより立ち入って考察されるならば、それは哲学者に十字架を負わせると思われる。というのも、永遠へと互いに継起する宇宙の諸状態から成る決して完結されえない系列が、どのようにしてありとあらゆる転変を包括する全体へともたらされうるのかが、容易には理解されえないからである。(II 391)

上記に見た通り、「絶対的全体性」は世界概念の定義に含まれ、他の系列の部分ではないことを意味し、その限りで否定的な仕方で説明される。また、世

界が他のどの系列の部分ではないというのは、量の観点からみれば、世界が他のどの系列よりも大きいということである。それゆえ、世界の絶対的全体性は、その時間的・空間的な量が無限であることを含意する。しかし、無限量は単位の継起的付加によって有限時間内に測りえないものであるため、感性を通じて世界全体の量を認識することは不可能である。それゆえ、世界が諸実体から構成される完結した絶対的全体であることと、それが無限量を有し完結しえないこととの間に矛盾が生じるのである。

カントは、無限な全体としての世界が感性によって認識不可能であることから、絶対的全体としての世界が認識不可能であると判定することを誤謬とみなす。というのも、絶対的全体としての世界は、その無限な延長や持続が測定不可能である点で、「直観的認識の諸法則」には「従っていない」が、だからといって「知性と理性の諸法則」に「反する」わけではなく、知性による世界の認識可能性は否定されないからである（II 389）。絶対的全体としての世界は「知性と理性の諸法則」に従えば認識可能である。にもかかわらず、「直観的認識の諸法則」に従った量的認識を基準として、絶対的全体としての世界が完全に認識不可能だと判定する誤謬は、「取り違えの形而上学的誤謬」と呼ばれる（II 412）¹⁹。カントによれば、取り違えの誤謬を防止するためには、「感性的認識の固有の諸原理がその諸限界を超えて、知性的なものどもに触れないように注意しなければならない」という規則を採用すればよい（II 411）。つまり、知性の認識対象としての世界が完結性を有するか否かを、その量が有限時間内に計測可能かどうかを基準にして判定することを防止すればよいのである。

だが、これによって、無限な全体という感性起源の世界概念と、諸実体から成る絶対的全体という知性起源の世界概念の間の矛盾が解消されるとしても、起源を異にする二つの世界概念がどのような仕方に関係するのかという点については、まだ説明が与えられていない。他方、ある箇所では、世界全体の無限な量が、「尺度を継的にあてがうことなく数量を一目で判明に識別する」神的知性によって認識されることが示唆されている（II 388 Anm. II）。この神的知性が認識する世界とは叡智界であるが、そのように記述される叡智界とはどのようなものなのか。次節ではこれらの二つの問いに取り組むことで、最終的に二つの世界概念の峻別そのものが、『批判』のアンチノミー論の発展史における『就職論文』の重要な意義であることを示す。

第三節 二つの世界概念の関係と『就職論文』の発展史的意義

二つの問いに答える手がかりとなるのは、『就職論文』第五章の以下のテキ

ストである。

純粹知性の諸法則に従うならば、原因づけられたものどもから成る任意の系列はその原理を有する。つまり、原因づけられたものどもから成る系列における背進が終項なしに与えられることはない。他方で、感性的諸法則に従うなら、同位的に秩序づけられたものから成る任意の系列はその指定可能な始まりを有する。これらの諸命題は、そのうちの後者が系列の測定可能性、前者が全体への依存性を含意するのだが、誤って同一のものとみなされる。(II 415)

このテキストには、世界の認識をめぐる知性の法則と感性の法則の対立が看取される。まずは知性の法則に従った世界の認識について考察しよう。バウムガルテンの『形而上学』において、「他方のものの根拠を含むもの」は「原理」、「原理」に依存するものは「原理づけられたもの」と名付けられる。特に「現実存在の原理」は「原因」、それによって原理づけられたものは「原因づけられたもの」と呼ばれる (M. §. 307)。この用語法を踏まえると、引用文の前半部分で述べられているのは、世界を構成する有限諸実体が神によって「原因づけられたものども」であり、系列において原因を遡る背進は神という終項において完結するということであると言える。

原因系列としての世界が神を終項として有することは、『就職論文』第四章においてより詳細に説明されている。第四章の主題は叡智界の形式の原理、すなわち、世界を構成する有限な諸実体の間の「普遍的連結の根拠」(II 398)である。カントは諸実体の「普遍的相互性 [commercium]」を物理影響説によって説明する。物理影響説によれば、諸実体は物理影響を通じて相互に作用しあうことで叡智界という「実在的全体」を構成する。また、こうした諸実体の「相互性」を可能にする原理が神だとされる (II 409)²⁰。それゆえ、知性の認識対象としての世界は、物理影響を通じて相互に作用しあう諸実体から成る全体であり、この全体は神を「原理」として可能となるものであると整理することができる。これにより、知性によって認識された世界がどのようなものかという問いに答えることができた。

次に引用文の後半部分に移ろう。「感性的諸法則」に従って世界を認識するというのは、単位となる部分を世界全体に至るまで積み重ねてその量を測定することである。もし感性が世界全体を認識しうるとすれば、それはこの計

測が有限時間内に終了する場合、つまり、世界が「指定可能な始まり」を有する場合である。しかし、第二節で示した通り、感性によって認識される世界は無限量を有するため、その量を測定する操作は有限時間内に完結しえない。したがって、世界は「指定可能な始まり」を持たない。

カントの眼目は、世界の量が測定不可能で始まりを持たないことを理由にして、知性による世界の認識可能性をも排除する誤謬を防止することである。この誤謬の原因は、叡智界を構成する諸実体の相互性が神を原因（原理）とすること、すなわち、諸実体の「全体への依存性」と、感性界の量が有限時間内に終わること、すなわち、その「測定可能性」とを同一視する点にある。逆にいえば、知性的認識と感性的認識、ないしは叡智界と感性界を峻別し、後者の感性的認識に依拠して、前者の叡智界が可能か否かを判定することを回避すれば、上記の誤謬は防がれる。

問題はこの二つの世界概念がどのように関係するのかわかり、これが残されたもう一つの問いであった。この問いに十分に答えることはできないが、本論文では、『就職論文』の二世界論が次の点で『批判』のアンチノミー論の形成に寄与したことを示す。すなわち、『就職論文』における二つの世界概念が、『批判』のアンチノミー論における「数学的全体」と「動力的全体」の区別（A418f./B446）の萌芽となったという解釈を提示する²¹。

『就職論文』の感性界は、単位の継起的付加という「総合」（II 387）によって認識される世界を指すが、それが『批判』の「数学的全体」に相当することは比較的容易に見て取れる²²。他方で、『就職論文』の叡智界が『批判』の「動力的全体」に対応することは、次の二つの理由に基づいて支持される。第一に、『就職論文』において、叡智界の認識は知性の「《実在的使用》」（II 393）によって行なわれるが、そこで用いられる知性的概念として列挙されている「可能性、現実存在、必然性、実体、原因」（II 395）は、いずれも『批判』において動力的カテゴリーに分類されるものである。それゆえ、叡智界の認識が動力学に関わっていることが読み取れる。第二に、上記に見た通り、叡智界は、物理影響を通じた諸実体間の相互性によって成り立つ全体であるが、この諸実体間の相互性が動力的な因果関係であると考えられる。これらの二つの理由から、『就職論文』の叡智界が、『批判』の「動力的全体」につながると考えることができる。以上に鑑みると、『就職論文』の二世界論が、「数学的全体」と「動力的全体」の区別、つまり、「数学的アンチノミー」と「動力的アンチノミー」の区別（A529f./B557f.）を用意したと解釈することができるのである。

おわりに

本論文は、世界の量が無限か否かという第一アンチノミーの問題に即して『就職論文』を読解することで、世界に関する感性的認識と知性的認識の峻別、ないしは感性界と叡智界の二世界論が、「数学的アンチノミー」と「動力学的アンチノミー」という『批判』のアンチノミー論における基軸的な区分の形成に寄与していることを明らかにした。そして、これこそが、「アンチノミー問題」の第二段階に位置づけられる『就職論文』が有する重要な発展史的意義に他ならないのである²³。

注釈

(1) カントの著作を参照する場合は、アカデミー版カント全集の巻数をローマ数字、頁数をアラビア数字で表記して典拠を示す。ただし、『純粋理性批判』を参照する際には、J・ティーマーマン校訂の哲学文庫版を用い、慣例に従い、第一版と第二版（それぞれ A、B と表記）の頁数を記す。覚書（レフレクシオン）を参照する場合は、E・アディッケスによる整理番号を略号 *Refl.* の後に示す。原文のスモールキャピタルは《》で括り、イタリックとゲシュペルトは圏点で表現する。引用部分内の括弧 [] は引用者が挿入したものであり、[...] は中略を表す。

(2) Norbert Hinske, *Kants Weg zur Transzendentalphilosophie. Der dreißigjährige Kant*, Stuttgart et al. 1970, S. 108. なお、本論文では、アンチノミー論という用語を、『純粋理性批判』の「純粋理性のアンチノミー」という一つの章を指す語として使っており、ヒンスケが用いる「アンチノミー問題」から区別する。

(3) Ebenda, S. 108f. 二つの主張の対立という意味でのアンチノミー概念は、『批判』におけるアンチノミーの複数形の用法に対応する (Ebenda, S. 103.)。

(4) 本論文において、「知性」は『就職論文』における *intellectus* ないし *intelligentia* の訳語として用い、『批判』における *Verstand* の訳語である「悟性」から区別する。

(5) Ebenda, S. 109f. 諸法則の対立という意味でのアンチノミー概念は、『批判』におけるアンチノミーの単数形の用法に対応する (Ebenda, S. 100ff.)。

(6) Ebenda, S. 110. 第三段階において、「純粋理性の諸法則の [...] 抗争」(A407/B434)としてのアンチノミー概念が成立する (Ebenda, S. 106f.)。

(7) アディッケスは、 κ 段階に分類される一群の覚書を 1769 年に書かれ

たものと推定している。その理由についてはカント全集 XIV 巻の序論を参照のこと (XIV XXXVIII)。

(8) Lothar Kreimendahl, *Kant – Der Durchbruch von 1769*, Köln 1990, S. 156ff. また、J・シュムッカーも、1765年から1771年に書かれた覚書を読み解くことで、理性諸法則の対立としての第三段階の「アンチノミー問題」は、1769年の大いなる光よりも前に完成していたという見解を取っている (Josef Schmucker, *Zur entwicklungsgeschichtlichen Bedeutung der Inauguraldissertation von 1770*, in: G. Funke & J. Kopper (Hrsg.), *Akten des 4. Internationalen Kant-Kongresses*, Teil 1, 1974, S. 269-274.)。

(9) 『批判』では、悟性は「規則の能力」、理性は「原理の能力」(A126, A299/B356)と定められ、アンチノミーは悟性と理性の対立として描かれている (A422/B450, A486/B514, A529/B557; vgl. Hinske, ebenda, S. 107.)。

(10) ヒンスケはクライメンダールの批判に対して、もし理性諸法則の対立という意味でのアンチノミー概念が1769年には成立していたとするならば、理性諸法則の対立が『就職論文』に登場しないのがなぜかが説明できなくなると反論している (Norbert Hinske, *Prolegomena zu einer Entwicklungsgeschichte des Kantschen Denkens Erwiderung auf Lothar Kreimendahl*, in: R. Thesis & C. Weber (Hrsg.), *De Christian Wolff à Louis Lavelle, Métaphysique et histoire de la philosophie*, Hildesheim et al. 1995, S.111.)。

(11) κ 段階 (1769年) の覚書の検討は別の機会に譲る。また、理性諸法則の対立という意味での「アンチノミー問題」の形成過程については、城戸淳『理性の深淵 カント超越論的弁証論の研究』(知泉書館、2014年) 56-62頁を参照のこと。

(12) バウムガルテンの『形而上学』第四版を参照する際には、項番号を略号 M の後に表記する。

(13) バウムガルテンの世界概念の第二・第三の特徴については、増山浩人『カントの世界論 バウムガルテンとヒュームに対する応答』(北海道大学出版会、2015年) 28-29頁を参照のこと。

(14) 大小比較を部分と全体という対概念によって捉える考え方の源泉は、ライプニッツとヴォルフに求められる。この点については、Matteo Favaretti Camposampiero, *Mereology and mathematics: Christian Wolff's foundational programme*, in: *British Journal for the History of Philosophy* 27(2019), S. 1151-1172.を参照のこと。

(15) 1764年の『自然神学と道徳の諸原則の判明性に関する研究』で、数

において「単位に対する量の比 [Verhältniß] が規定される」(II 278) と述べられていることが、一つの傍証となる。

(16) René Descartes, *Œuvres complètes*, C. Adam & P. Tannery(ed.), Bd. VIII, Paris 1996, §. XXVII, p. 15.

(17) アレクサンドル・コイレ『コスモスの崩壊 閉ざされた世界から無限の宇宙へ』(野沢協訳、白水社、1974年)、及びA・W・ムーア『無限 その哲学と数学』(石村多門訳、東京電機大学出版局、1996年) 109-141頁を参照のこと。

(18) カントの無限概念については、城戸、前掲書、188-197頁を参照のこと。

(19) 取り違え [subreptio] の概念史的背景、また、『就職論文』においてその語が果たす役割については、城戸、前掲書、15-21頁を参照のこと。

(20) カントの物理影響説については、Eric Watkins, *Kant's Theory of Physical Influx*, in: *Archiv für Geschichte der Philosophie* 77(1995), S. 285-324.を参照のこと。また、『就職論文』における実体間の相互性の議論については、増山、前掲書、166-171頁を参照のこと。

(21) 「数学的全体」と「動力的全体」を区別するカントの発想の由来は、バウムガルテンにおける数学的物体と物理的物体の区別に求めることができると思われる (M. §. 289, §. 296.)。後者の数学的物体と物理的物体の区別については、増山、前掲書、52頁を参照のこと。

(22) もっとも、『就職論文』は、「総合」が感性の仕事とされる点で、それが悟性 [Verstand] の作用とみなされる『批判』(Vgl. B129f.) とは異なっている。

(23) 有益なコメントをくださった二名の査読者に感謝申し上げる。

一次文献

Baumgarten, Alexander Gottlieb, *Metaphysica*, Halle 4. Aufl. 1757. (Metaphysica/Metaphysik. Historisch-kritische Ausgabe, übersetzt, eingeleitet und herausgegeben von G. Gawlick & L. Kreimendahl, Stuttgart-Bad Cannstatt 2011./ *Metaphysics. A Critical Translation with Kant's Elucidations, Selected Notes, and Related Materials*, C. D. Fugate & J. Hymers(trans.), London et al. 2013.)

Descartes, René, *Œuvres complètes*, C. Adam & P. Tannery(ed.), Bd. VIII, Paris 1996.

Kant, Immanuel, *Kant's gesammelte Schriften*, hrsg. v. der Königlich

Preußischen Akademie der Wissenschaften et al., Bd. I-XXIX, Berlin 1900ff.

Kant, Immanuel, Kritik der reinen Vernunft, hrsg. v. J. Timmermann, Hamburg 1998.

邦訳

カント、イマヌエル『可感界と可想界の形式と原理』（山本道雄訳）（『カント全集 3 前批判期論集 3』（岩波書店、2001年）、327-386頁。

デカルト、ルネ『哲学原理』（三輪正・本多英太郎訳）『デカルト著作集 第3巻』（白水社 1973年）、9-162頁。

その他の文献表

Camposampiero, Matteo Favaretti, Mereology and mathematics: Christian Wolff's foundational programme, in: British Journal for the History of Philosophy 27(2019), S. 1151-1172.

Hinske, Norbert, Kants Weg zur Transzendentalphilosophie. Der dreißigjährige Kant, Stuttgart et al. 1970.

———, Prolegomena zu einer Entwicklungsgeschichte des Kantschen Denkens Erwiderung auf Lothar Kreimendahl, in: R. Thesis & C. Weber (Hrsg.), De Christian Wolff à Louis Lavelle, Métaphysique et histoire de la philosophie, Hildesheim et al. 1995, S. 102-121.

城戸淳『理性の深淵 カント超越論的弁証論の研究』（知泉書館、2014年）。

コイレ、アレクサンドル『コスモスの崩壊 閉ざされた世界から無限の宇宙へ』（野沢協訳、白水社、1974年）。

Kreimendahl, Lothar, Kant – Der Durchbruch von 1769, Köln 1990.

増山浩人『カントの世界論 バウムガルテンとヒュームに対する応答』（北海道大学出版会、2015年）。

ムーア、A・W『無限 その哲学と数学』（石村多門訳、東京電機大学出版局、1996年）。

Schmucker, Josef, Zur entwicklungsgeschichtlichen Bedeutung der Inauguraldissertation von 1770, in: G. Funke & J. Kopper (Hrsg.), Akten des 4. Internationalen Kant-Kongresses, Teil 1, Berlin 1974, S. 263-282.

Watkins, Eric, Kant's Theory of Physical Influx, in: Archiv für Geschichte der Philosophie 77(1995), S. 285-324.